

ふたたびシモーヌ・ヴェイユへ

—「死の瞬間」を生きる—

水 谷 千鶴子

1. ふたたびシモーヌ・ヴェイユ

「教育の最重要な部分＝(学問的な意味で)認識するとはどういうことかを教えること。
ナース
保育する人」

シモーヌ・ヴェイユの最晩年、1943年に書かれた「ロンドンで書かれた覚え書」の最終記述箇所である。1942年11月10日、亡命先のニューヨークを出発、11月26日リバプール着、一ヵ月後ロンドン着、ロンドンのフランス亡命政府に勤務、1943年4月下旬ロンドンのミドルセックス病院入院、8月24日転院したアシュフォードの病院にて死亡。イギリスに来て死を迎えるまでの9ヶ月という短いロンドン滞在期間に書かれたこの「覚え書」、その最終記述を、わたしはシモーヌ・ヴェイユのわたし達への最後のメッセージとして受けとめたい。

本稿は18年ぶりにあらためてシモーヌ・ヴェイユと向きあった作品である⁽¹⁾。なぜふたたびシモーヌ・ヴェイユなのか。18年前わたしはシモーヌを「自然的世界・此岸」と「超自然的世界・彼岸」の境界に生きる「マージナル・ウーマン」と表した。二つの世界の境界に生きるシモーヌは、知性を「自然的世界」から「超自然的世界」へとわれわれの向きを変える能力と捉えていた。知性とは世界の彼方にある「實在」即ち「神からその息が送られてくるような＜真理＞の知識」を把握する力である。

そのシモーヌとの出会いから18年、いまわたしのまわりの知的状況は、「真理」に向かう知性から大きく外れてしまったのではないだろうか。「真理」を畏れることのない知が暴走している。こうした状況のもと、私たち「ナースする人」は、「真理」への畏れを持って知性を鍛えているだろうか。「認識するとはどういうことかを教える」教育者として私たちは自ら日々精励しているのだろうか。哲学教師としてシモーヌから講義を受けた彼女の教え子は、次のようなシモーヌの言葉をノートに書き記したそうである。

「・・・もし『いかに』という問いではなく、『なぜ』という問いをどうしても放たずにはいられなくなるような状況に立たされなかったとしたら、人はこのまま生き、そして死んで行く。」(田辺 1986)

人生に対して問いを出さずにすむ知などありえようか。しかし現在、この知のありようは大きく変化した。自分で自分の人生を作ろうとはしない学生たち。彼・彼女らは「この

まま生き、そして死んで行く」ことを恐れない。問いが無い人生は「いかに」だけが闊歩し、それゆえ彼・彼女たちは知的意識を欠いた日常意識に終始し、日々の「常識」を遊戯する。そしてまたその「いかに」のための「常識」に安住しそれを教育しようとする教師たち。

「これから先の人生を見とおして、人生を何か価値のあるものにしようというかたいくじけない決心をし、意志と働きによって、一たん決めた方向へあくまでその決心をつらぬいて行くということがどういうことか」を知っていたシモーヌ・ヴェイユは、21世紀のこの知的状況をいかに捉えるだろうか。ふたたびシモーヌ・ヴェイユの思策の跡を辿ってみようと思う。そして「思索する」こととは何か、人が生き死ぬとは何かをあらためて考えてみたい。

2. 「巨獣」が闊歩する

シモーヌ・ヴェイユが「世界の中に中心はない、ただ世界の外側にだけある」と書くとき、それは彼女が、プラトンの哲学を正統に引き継いだ思索家であることを再確認させる。

「世界の外側に中心を窺る」、この記述はプラトンの「洞窟の比喻」を思い起こさせるものであるし、『パイドロス』の天上に向けて駆け上がる馬車の描写を思い起こす。洞窟（世間）の中にあるのは、「真理らしきもの」にすぎない、真理は洞窟の外にある。洞窟の外に出た者だけが真理に近づくことができる。しかし洞窟の中にいる人々は、洞窟の壁にうつる自分を含めた諸事象の影を真実の姿として疑わず、洞窟に安住する。プラトンの『国家』で描かれるこうした「巨大な動物」である人間たちを、シモーヌは「巨獣」と称し、その群集性を批判する。

世界の外側に目を向けることを妨げているもの、「義によって神に似ることを魂に妨げているもの」（「ギリシア」128）、それは「肉」であるが、その肉よりも大きな障害は「社会」であるとして、シモーヌ・ヴェイユは『国家』第六巻492節から493節を訳出、引用している。「集团的なもの」がこの世界に蔓延すると若者はどうなるのだろう。「・・・若者は、他の人びとの意見に合わせて、あることがらは美しいと言い、あることがらは恥ずべきことだと言うのだ。」そしてさらにこの若者がこの大衆的意見（巨獣）に納得がいかない時には、若者に強制力を加えるのだよ、誰が？「教育者だよ」。「きみは知らないのかね。説得を受け容れない人間は、不名誉や財産没収や死刑によってかれらから罰せられることを。」（「ギリシア」130）日常の世界に生き、「多数者の通念」を教える教育者は、プラトンの時代も、シモーヌ・ヴェイユの20世紀も、権力をもって制裁することにおいて、この21世紀と変わらないようである。

「善と悪」「正義と不正」こうしたものを、すべて「巨獣」の意見に合わせる。「獣の気に入るものを善と称し、機嫌を損ねるものを悪と称するのだ。ほかに基準はないのだ。必要やむをえないことがらを義しく美しいものと称するのだ。・・・奇妙な教育者ではないかね」

とソクラテス（同上 132）。そのソクラテスと同様、シモーヌは「じっさい、われわれの教育に寄与するすべての要素は、ある一時期に『巨獣』の批准を受けたものから構成されている」と指摘する（同上 134）。

さらにこの「巨獣」の意見はいきあたりばつりのもので、「真理に合致していることがあっても、それらは本質的に真理とはなんの関係もない」のであるから（同上 134）、人が悪を働くことを思いとどまる時、それは「巨獣」の意見に従うのであって世界の外にある超越的真理に従ったものではないのだ。世間の道徳に従ったにすぎないのである。道徳には、「社会的な道徳と超自然的な道徳という二つの道徳があつて、恩寵に照らされた者のみが第二の道徳に近づくことができる」（同上 131）とシモーヌは考えるが、道徳教育と今日われわれがいうところのものは、ここでいう前者、世界内の目に見えるもののみを真にあるものとした社会的な道徳である。それはこの集団で生きていくためにやむをえず受け入れる道徳にすぎず、自ら真なるもの、善なるものを求め、思惟することで受け入れた道徳ではない。道徳を強制する者も受け入れる者も何も疑わない、受け入れれば世間から外されないだろう、そういう道徳なのだ。

しかし「巨獣」はプラトンのギリシア時代の巨獣に限らない。シモーヌ・ヴェイユにとって、ローマもイスラエルも「巨獣」であつた。「ローマ、それは神を信じない巨獣、唯物的で、自分自身だけしか崇めない巨獣である。イスラエル、それは信仰をもつ巨獣」であつた（重力 270）。そして現代も。これら巨獣が闊歩するところには「重力しかない。」すなわち力は世界の中心に中心にと引き寄せられる。世界の中心にのみ向かう限りわれわれは「偶像崇拜」に陥る。

ではこの「重力だけの君臨しているような社会」からわれわれはいかにしたら、「生きながらえる」ことができるのか（同上 271）。この世界の中へ中へと進行する「重力」に対抗するのが「恩寵」、超越的な力である。この力がわれわれを「巨獣」の闊歩する世界から上昇させる。「人間が社会的なものに対して優位に立つためには、超越的な、超本性的な、真正に霊的な領域のなかにはいつて行くほかはない。それまでは、事実上、人間がなにをしたところで、社会的なものは人間を凌駕している。」（同上 270）

巨獣の一員として偶像崇拜をするのではなく、真に在るものに目を向けるためにはわれわれはこの「集団的なもの」からこの身を引きあげていなければならない。社会的存在であるが「社会的」存在で終わつてはいけなない。この現世に、この社会に根を持ちつつ、精神はこの現世を越えていなければならない。その緊張のもとで生きていかねばならない。

3. 「根をもつこと」と「根こぎ」

シモーヌ・ヴェイユはいうまでもなく徹底した近代的個人であつた。個人としての自由は「人間の魂に欠くべからざる糧」であるし、「平等は人間の魂の生命的要求の一つ」であり、「自発性と責任、すなわち有用な存在であり、さらには不可欠な存在であろうとする感

情は、人間の魂の生命的要求である」と考えていた。社会に不可欠な存在として、この社会に積極的に参加すること、シモーヌの言葉でいえば「根をもつこと」、「根づく」ことは近代的個人のベールーフ・使命であった。

「根づくということは、おそらく人間の魂のもっとも重要な要求であると同時に、もっとも無視されている要求である。これはまた、定義することがもっとも困難な要求の一つである。人間は、過去のある種の富や未来への予感を生き生きと保持している集団の存在に、現実的に、積極的に、かつ自然なかたちで参加することを通じて根をおろすのである。」（「根」63）

しかし単なるエゴイストとして根づくわけではない。「人間は意のままにエゴイストになれるわけではない」し、「自分自身を目的とみなすことはとてもできない」のである。「わたし・人格」と「われわれという集団・社会」と「われわれの外にある実在・無人格」、このトリアードのバランスを繊細に関係づけながらシモーヌはその生を渡ろうとする。そのためにはまず「わたし」は「われわれ」の社会に根づくが、「われわれ」が「わたし」より前に進み、立ち足かるとき、「わたし」の人格は「われわれ」に吸収される。「人格に向かって、集団的なものの中に埋没してはならぬと説くべきであり、人格の内部に無人格的なものを成熟させなければならない」のである。（「ロンドン論集」182）

「われわれ」が「巨獣」になるとき、その集団的無思考が「わたし」を凌駕し、「わたし」の自由を奪うだけでなく、「われわれの外に在る実在」との「根」を奪うことになる、わたしは根を奪われる、「根こぎ」にされる。

ではどこで私の人格が「根こぎ」にされているのか。シモーヌ・ヴェイユはそれを「金銭」と「教育」において検証する。「根こぎの病が最も悲痛なもの」としてあらわれるのは賃金労働者においてである。シモーヌ自身工場労働者としてその苦悩を引き受けたように、金銭の奴隷とならざるをえない賃金労働者は「精神的に根こぎにされ」ている。そして第二の「根こぎ」は教育において顕著にあらわれる。超越的実在との関係で世界を捉えていたギリシア的伝統が忘れられた現代、文化は技術的な、プラグマティックな文化となり、その結果「人間の運命にかんしてなんらの観念もいдаかずすませられる」人間を増やしている。こうした知的環境では「勉学のために勉学しようという意欲、真理への意欲はきわめて稀なものになってしまった」とシモーヌは嘆く。「根を持つこと」は、シモーヌ・ヴェイユの最晩年に書かれた書物であるが、それから半世紀をへた今日、「勉強のために勉強しよう」といってもおそらくまったく通用しないだろう。いまや勉学の目的は目に見える成果をもたらすものでなければならないからだ。「根こぎの病」が万延している結果、個人はそれぞれ自分のみを目的として歩き出し、科学は「善や悪とはなんらの関係もなく、とりわけ善とはなんらの関係もなく対象を考察する研究」であり、「事実は事実のみを研究する」にすぎなくなった。（「根」275）それゆえこの「根こぎは偶像崇拜を生み出す」のである。（同上 88）しかし偶像崇拜する人間は、自分が崇拝しているものが偶像だとは気づかない。なぜなら、真理への意欲のもとで勉学しているわけではないから、真理と偶像の

違いが理解できないのである。偶像崇拜のもとで研究する者に対するシモーヌの記述は次のように辛辣である。

「その著者が、まずは筆を取るに先立って、ついでは原稿を印刷にまわすに先立って、真の憂悶を感じつつ、『私は真理のなかにいるだろうか?』と自問したという印象を与えるような書物、あるいは論文の数は多いであろうか? また書物をひらくに先立って、真の憂悶を感じつつ、『私は真理を見いだそうとしているだろうか?』と自問するような読者の数は多いであろうか?」(同上 281)

この状況をシモーヌは「じたばたもがいている恐ろしい病」であるという。そして21世紀の私たちもまた変わらずずっとじたばたし続けている。

こうして「根をもつこと」とは、この現実社会に「根をもつ」だけではなく、現実の彼方に在る真理の世界に「根」をもつことでもあるのだ。「本当の中心は世界の外にあるのを認めること」とシモーヌはいうが(「神」116)、地上の「根」は、宇宙的世界の「根」とつらなる「根」なのである。そうでない限りわれわれは簡単に「根こぎ」にされる。「この世のすべての人間はある地上の詩によって、根をおろしている。これは天上の光の反映であり、宇宙という祖国とともに多少とも漠然と感じられる自分のきずなである。不幸は根をぬかれていることだ。」(同上 133)

見える世界をつき破り、「重力だけの君臨している社会に、生きながらえる力」をもつために、知性はその彼方を視なければならない。

4. 知性とその彼方

1942年アメリカへの亡命の直前、シモーヌ・ヴェイユは、第一次大戦で脊椎を負傷し、40年以上、ベッドに横たわったままその肉体の苦悩・不幸を抱え、それゆえに戦争の「悪」を風化させることなく魂を浄化させていく詩人ジョー・ブスケと出会う。そしてその後の往復書簡において、ブスケがその肉体的苦痛のなかに抱えているここ20年来のヨーロッパの運命と第一次世界大戦から今また次なる戦争への道を進みつつある20世紀半ばの苦境を知るためには、「卵の殻」を突き破ることだとブスケに書き送っている。「卵の中の暗やみから真理の光の中へと出てこられるためには、あとはただ、せいぜい殻をつき破るだけでよいのです。・・・卵とは、この目に見える世界です。」(田辺 1984 200頁)

目に見える世界の殻を破ること、プラトンの洞窟から外にでること、知性が知性の使命を果たすには、知性は知性の領域の彼方(目に見えない世界)を目指さなければならない。目に見える世界の背後には目に見えない世界があることを認めること、それが知性の役割である。「・・・知性は、自己よりも一段とすぐれて、自己をはるかに超えた所へと思考をみちびく能力が魂の中に存在することを認めるとき、まったく完全に自己に対して忠実でありうるのである。この能力が、超自然的な愛である。」(「超」100)

「超自然的な愛」をもつとは、すなわち「この世の外側に、つまり空間と時間の外側に、

人間の精神的世界の外側に、人間の諸能力が到達しうるあらゆる領域の外側に、ひとつの实在が存在する」ことに同意することである。（「ロンドン」84）その实在へ愛と注意力をむけることである。そして地上の中心を天上へ移したとき、人は地上にいる仲間たち、自分以外の他者にもその自律性を認めることになる。なぜなら中心はわれわれ・世界の内には無く、われわれ・世界の外を超えたところにあるのだから、われわれの内に中心と周辺を位置づける根拠はありようも無いからである。われわれの間に差異はあり、その差異を認めるが、そこに差別はありえない。

「マタイによる福音書」（「あなたがた二人か三人わたくしの名で集まるときにはわたくしはその人たちの間にいるだろう」）を引きつつ、シモーン・ヴェイユは三位一体の友情を説く。「ふたりの人が一つになりながら、二人をはなしているへだたりを気をつけて尊重するということは、もし神がおのおのの人に現存していなければ不可能なことだ。」（「神」154）

人と人のあいだの「超自然的な愛」、この愛をシモーンは、「超自然的な知」ともよんでいる。「超自然的な愛・知」を目指した能力をもつために、知性は沈黙し謙虚にならざるを得ない。「知性の射程距離内にあり、とらえ得るものではあるけれども、知性以上の世界を沈黙のうちにいったん通過したのちでなければ知性がとらえ得ない真理、そういう真理がいくつかあるのです。」（「神」255）沈黙し、その彼方にある真理への確信をもって知を磨く。またこの沈黙を彼女は、「聴き入ることに集中」するとも書いている。（同上 255）集中して聴き、沈黙するとき、われわれは肯定も否定もいずれにも答えをみいださない。こうした「知的な誠実さ」を尽くすことは、自分に与えられた召命であるとシモーンは書き送っている。「すべての思想に対して、等しく受容的であり、等しく態度を保留する」この「知的誠実さ」をもってわれわれは、真理・神への愛ゆえに沈黙して厳しい思考を続けねばならない。そして、肯定、否定という矛盾を徹底的に思考したとき、その論理に「てこ」がはたらき、扉が開かれる。「知性の領域の彼方」がみえてくる。それゆえそこへいくためには徹底的に知性の領域と取り組まなければならない。単なる観相ではない知的修練、「その領域を端まで通り越してきたということが必要である。非の打ちどころのない厳密さできちんとつけられた道をたどって、通り越してきたということが必要である。そうでない限りは、かなたにいてどこか、まだこちら側にいるのだ。」（「超」99）こちら側にいる知性からかなたを目ざす知性となったとき、それをわれわれは理性と呼ぶのである。「自己をはるかに超えたところへ思考をみちびく能力」を持った知性が、「理性」とよばれるのだ。「目で見、手で触れることのできるいっさいの力は、それがけっして越えることのできない見えざる限界に服している」（「根」307）ことを知が知ったとき、その知は理性である。知性から理性への道のり、そこに「ロゴス」が仲介者として登場する。

シモーン・ヴェイユは「ロゴス」を、「知性から理性へ」「理解できるものから理解を超えたものへ」、「無知から十全な叡智へ」、「時間に服する生成から存在の充溢へ」の中間に位置するもの（「ギリシア」157）、「自然と超自然との交わる点」（「超」35）にあるもの、

それら両者を仲介するものとする。「自然的なもの」から、「超自然的なもの」へ向かうその仲介者としてのロゴスは、「騒音に言葉をあてはめる」のではなく、「ほんもののことば」を探し求めるのである。（「重力」202）

われわれは「ほんもののことば」を磨かねばならない。そのために知性をとぎすまさねばならない。「知性は決して秘儀のなかに深くはいりこむことはできない。しかし知性は、それも知性だけが、秘儀を表現することばの適不適を説明できる。そのために知性を行使するときは、ほかのどんな場合にもまして、それをとぎすまし、するどくし、正確で、厳密で、きびしいものにしなければならない。」（同上 228）

知性とは理性であること、そして「理性の最後の歩みは、理性を越えるものが無限にあることを認めることにある」とパスカルが書くように、その力をつける歩みは無限であるだろう。しかしそれを恐れない、むしろそれは悦びとする、そうした知的環境をとりもどしたいのだが。

5. 教育の役割 魂の向きを変える

真理を求める知性・理性の歩みは、世界の外、天空を目指して歩む。この地上から天空へ、それは垂直の歩みである。「われわれの役割は、普遍的なものの方向にいつも視線を向けていることである。」（「重力」112）しかし今われわれの「知といわれるもの」は、この地上の日常世界を動き回るだけではないだろうか。学問・科学は、われわれの目に見える領域、水平的領域だけを対象としている。そうである限り、そこにはそれぞれの特異性だけで構築される科学だけが跋扈し、それら学問・科学は自らを普遍的視点から省みることはないだろう。

この水平的「空さわざ」を垂直的思考に変えるために、われわれは魂の向きを変えねばならないと考えるシモーヌ・ヴェイユは、ここでもプラトンの『国家』を参照する。教育とは、魂に知識を与えるものと考えられているが、そんなものではないのだ。教育とは、魂をこの「生成流転する世界から一転させて、実在および実在のうち最も光り輝くものを観ることに堪えうるようになるまで、導いていかねばならない」ものである。（『国家』501）魂の向きを変えることが教育である。地上に根を張った、感覚的で特殊な魂の「肉的部分」を「根こぎ」にし（「ギリシア」143）、「高みから到来する光のほうにその人間を向き直らせる」こと、「転回」させ、そこに魂を注視させ、「見るべきところを見ること」を教えること、これが教育の役割だとシモーヌ・ヴェイユは考える。（「ギリシア」140）

1942年に書かれた「神への愛のために学校の勉強を活用することについての省察」というカトリックの学生のために書かれた文章においてシモーヌは、勉強する本当の目的は、真理への「注意力」を養うことであると強調する。「よい点をとること、試験に及第すること、学校の成績をよくすること」は望まなくてもよいが、「注意の努力をするたびごとに、たとえその努力が何も目に見える実を結ばなくても、その人は真理をとらえる適性を大き

くしているのだ」と言明する。（「神」73）だから真理へ注意を向けることは、勉強することの「唯一の利益」であり、それを養わない人は、「大きな宝を失っているのだ。」注意力の形成以外にも教育にすることには利点があるが、「それらはすべてとるに足りないものである」とヴェイユは言い切る。（「重力」213）プラトンが、元来魂には、真理を知ろうとする器官があり、それを導くのが教育であると書いたように、ヴェイユもまた、「学校の第一の義務は、子供の中にある注意力を発展させることである」と考えていたのである。（「ロンドン」211）

しかしここで間違っはならない。シモーヌ・ヴェイユも指摘するのだが、「注意力」とは、筋肉を緊張させることではない。しばしば生徒達は注意を促すと筋肉を緊張させるが、「何に注意しているかとたずねると、何も答えられない。彼らは何についても注意してはいなかった」のである。われわれが今日学生に注意していることとはこの「注意」ではないだろうか。注意されたから注意するにすぎない。こうした注意はすぐに忘れられる。そして筋肉を緊張させ、頑張って勉強して試験でよい点をとるかもしれないが、「そういう勉強はいつも無益である。」（「神」75）真理に近づきたいという「祈り」に込められた注意力を、学生もそして教員も謙虚に培っていかなければならないのに。

そしてその「祈り」とは願望である。希望があるから学ぶことに喜びがある。「知性は願望によってしかみちびかれぬ。願望があるためには、楽しみと喜びがなければならない。知性は喜びの中でなければ、大きくならないし、実を結ばない」のである。（同上 75）

無限なるものに向かって、それが分からない（分けることができない即ち無限である）からこそ分かりたいという願い。しかし有限なるわたしが、無限なるものにむかうとは、一体どのようなことなのか。この世界に「無いもの」を愛することはどうしたら可能なのか。シモーヌ・ヴェイユはいかにこの矛盾を生きようとしたのだろうか。

6. 「わたし」の消滅

深く真摯にキリスト教を信仰していたシモーヌ・ヴェイユであったが、彼女は生涯教会の洗礼を受けることを拒否した。神のもとにある教会とはいえ、教会も一つの集団・社会であり、それは「悪魔の領域である」ことを彼女は確信していたからであろう。（「神」20）シモーヌにとって社会的とはすなわち「集団的な感情」ということであり、その感情をもった教会は、「この世の王」（悪魔）として、その成員に「われわれ」の一部になれるということを強制する。彼女は、「ひとりで、例外なくどんな人間的環境とも縁遠くはなれていることが、わたくしには必要であり、わたくしはそう定められていると感じております」とペラン神父への手紙に書いている。（同上 21）教会もまたシモーヌにとっては「集団という巨獣」であったのである。教会という集団に「聖なる性格」を与えることは、教会で偶像崇拜が行われていることである。（「後期評論」445）偶像ではなく真なるものを求めているシモーヌにとって、教会に入ることは絶対にできないことであった。

人という人格的なものが、神という非人格的なものに近づくには、人格的な「わたし」を超えなければならない。ではいかにしたら超えられるのか。その第一段階は「われわれ」という集団から離れることである。それは「注意力」と孤独のなかではたされる。「非人格的なものへの移行は、孤独のなかでのみ可能な、稀有な資質の注意力によってはじめてはたされる。この孤独は事実上の孤独というだけでなく、精神的な孤独でもある。みずからある集団の一員、ある『われわれ』の一部分と考える人にとって、この移行ははたされない。」(同上) 集団的なものの中で、その騒々しさのなかには、普遍なるものに近づけない。「集団に馳せ参じ、そのなかに溺れようとする」ことは「もっとも危険」なことであると書いたシモーヌ・ヴェイユにとって、独りとなって、「真理が芽生え、成熟することのできるような静寂の確立」こそ欠くべからざるものであったのだろう。(同上 468) そしてまた現代のこの日本にとっても、今こそ「成熟と静寂」が求められているのだろう。

さて移行の第二段階であり、同時にこれを経なければ容易に集団化することになるものは、「人格的なもの」を超える、すなわち「わたし」そのものの消滅である。「われわれ」を離れるためにも、精神的に個人となった「わたし」はその個人に留まっていることはできない。個人にとって不可欠だと考えられていた近代の人権や民主主義といったものは、シモーヌ・ヴェイユにとっては「空中に宙ぶらりん」の「中途半端な価値」にすぎないのであった。(同上 457)

しかしなぜ、わたしは「わたし」に固執してはいけないのだろうか。それは「利己的だからいけないというわけではない(人間は自分の意のままにエゴイストになれるわけではないから)。むしろそうすることが、魂を充実した存在に向けず、無条件に存在する善にも向けなくて、個別的で偶発的な可能性にすぎないものに向けることになるからである。」

(「重力」242) わたしはこの個別性に固執することなく、「わたし」から離れて自分の外にでなければならない。この個別性の「わたし」をシモーヌは、「わたしの内部にあって泣きわめく動物ども」と称する。動物達は「たえまなく『わたし、わたし、わたし、わたし、わたし、わたし・・・』と泣きわめいているのである。」(「超」208) この「わたし」の欲求から外に脱けでなければならない。「『わたしならざるもの』に釘づけ」にされねばならない。(同上 214) 自分の外に出たときわたしは、特殊な「わたし」を捨てて普遍なるわたしをめざしている。

では外に脱出するとはどういうことか、神が外に在るからだろうか。否、神が自分の中心にいることを外から見るためである。「ひとりの人間であること」を捨てたとき、特殊なわたしという物体のなかに普遍な存在があることを確認することができる。「わたし」を出たわたしがわたしの中にいる神に視線をむけたとき、わたしは神の光・恩寵に照らされる。その光は、「個人が、個人であることをやめる程度に応じて過不足なく与えられるのである。」(「重力」201) それゆえシモーヌ・ヴェイユにとって「わたし、わたし・・・」とわめくことは許されていないこと、罪であるとされていた。「『私』をほろぼすこと、その他にわれわれにゆるされている自由な行為は皆無である。」(同上 81)

しかしシモーヌはこの世界においてわたしができること、しなければならないことを忘れてはいない。「みずから自分の根を引き抜くことによって、人はより大きな実在を求めることになる」ためにも（同上 101）、この世界に根をもちつつも、「自分の根を引き抜くこと」が彼女の人生において実践される。「人間として当然守るべき義務だけをきちんと果たすこと、それが私に身を引くすべを与える一つの条件である」（同上 103）と考えていたシモーヌは、神の光を浴びるために、その義務を果たそうとした。それは神にできないが、唯一ここにいるわたしにはできることなのであった。シモーヌが恐れていたことは、何もせずに死んでいくことであった。彼女は、「わたしは、死にぞこないをするよりも、生きぞこないをするのではないかというおそれをいつも心にいだいておりました」とモーリス・シャーマンへの手紙に書いている。（「ロンドン」265）

1942年、シモーヌ・ヴェイユは、戦火のフランスを離れ、ニューヨークに亡命したことに激しい後悔の念を抱いていた。何とかして再度戦時下のヨーロッパに戻りたいと願っていた彼女が、ロンドンの亡命政府の活動に参加することが認められ、自分の役割における希望が見え始めた頃、彼女は次のようなノートを綴っている。

「飢えでなかば死にそうになっている、その不幸な人が、路上に横たわっている。神は、その人にあわれみをかけられるが、パンを送ってよこすことはなされない。だが、今ここにいるわたしは、さいわいなことに神ではない。わたしは、その人に一片のパンを与えることができる。これこそ、わたしが神よりもまさった唯一の点である。」（「超」325）わたしの中心に神がいることが分かるからこそできる此岸にいるわたしの行為である。人と人のあいだに隣人愛があるとき、そこには神がいるのである。

こうして「われわれ」であることを否定し、また「わたし」であることをも消滅させたとき、そのわたしは「なにものでもない」わたしである。わたしは「無」でなければならない。そしてその「無であることを愛さなければならない。」（「重」200）これはいったいどういうことなのか。「十字架の上で、『わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか』といわれるキリスト。ここにこそ完全な、神の栄光の讃美がある。みじかくて終わりが定めなく、終わりが定めなくてみじかいこの地上での滞在のあいだ、ただこのように叫ぶこと、そして無の中へ消えて行くこと、—それだけでいいのではないか。」（「超」109）

見捨てられるという不幸のなかにいるわたし、わたしはしかしその運命を引き受けねばならない。愛さなければならない。そして「無のなかへ消えていく」、この不条理以外の何ものでもない生を生きたとはいかなることなのか。

7. 「必然」または「苦悩」を愛する

「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と問うキリストの姿を、シモーヌ・ヴェイユは「ヨブ記」のヨブに重ねている。神の僕として神に認められていたヨブが、サタンにより財産や子孫を奪われ、その身体までも激しい苦痛の中に投げ込

まれる。「この正しいわたしをこそ、神は救ってくださるべきではないか。・・何故わたしを敵とみなされるのか。・・何故苦役をわたしに与えるのか」とヨブは嘆く。このヨブに神とヨブとの「仲介者」と思われるエリフが語りかける「なぜあなたは神と争うとするのか。あなたは神を待つべきなのだ。・・苦難を経なければ、どんなに叫んでも力を尽くしても、それは役に立たない。」そして最後に神が登場する。神の言葉によってその全能の力を改めて知ったヨブは、神に反論した自分を悔い改める。「自分を退け、悔い改めます。」神はヨブの祈りを受け入れ、彼を元の境遇に戻される。

「ヨブ記は、一つの奇跡である。なぜかという、そこには、耐えがたいような苦痛にうちひしがれているときにしか、人間の心に宿ることができない思考、しかも、そのときにはまだ形をなしていず、いったん苦痛がしずまると、消え失せてしまって、二度と見いだすことができない思考が、完全な形で表現されているからである。」(同上 349)

見捨てられた者の苦悩、しかしその不幸を引き受け、苦痛をそのまま受け入れることが神に愛されることであること、「苦痛というたまものをくださる愛の神」(「神」93)を、シモーヌ・ヴェイユもまた疑うことなどなかった。

シモーヌ・ヴェイユは、この「ヨブ」にめぐりあった。ジョー・ブスケである。ブスケとのたった数時間の出会い、その時シモーヌはブスケにヨブの「不幸」をみたのである。ブスケとの往復書簡において彼女は次のように綴っている。「不幸について考えるためには、不幸を肉の中に釘のように深く深く打ちこまれたものとして持っていなくてはなりません。思考がそれをじっと見つめうるだけの強さをもてるまで、それを長く持ちつづけていなくてはなりません。・・・肉の中にはいった不幸が、自分の生きている時代の世界そのものの不幸となった人々は、さいわいです。」(田辺 1984 202頁)「ヨブ」もジョー・ブスケも共にその不幸を受容し「待つ」姿勢を貫いた。

12歳のときから間歇的に襲われる頭痛の発作に苦しむ自らの不幸を、ブスケの姿に重ねたシモーヌ・ヴェイユ、彼女が徹底的に苦痛を受容したとき、不幸を思考したとき、彼女は時間を超えることができた。「苦痛は、わたしたちを、時間に釘づけにするが、苦痛の受容によって、わたしたちは、時間の果てへ、永遠の中へとこばれる。」(「超」171) 苦痛がわたしを、実在・神・真理のもとへと運ぶ。苦痛は神が与える賜物である。だから神は「苦痛をそのまま手つかずに放置」するのだ。耐えられないほどの苦痛のなかでシモーヌ・ヴェイユは死を考える。しかし死を受容した時、「条件づきの予定された死の決意」ができた今、私は平静であると書く。それは、時間を超えるが時間内(現世)での自らの義務を果たそうとするシモーヌの死(生)の決意である。

さらにシモーヌ・ヴェイユは、「ヨブ記」に続く歴史における人間の悲惨さを、ギリシア悲劇「イリアス」で考察する。「誰かがいたのに、一瞬ののちにはだれもいない」情景、「たえまなく宙づりになっている破壊の危険」にみちた「イリアス」は、ギリシアとトロイの戦争を語る抒情詩である。その主題は力であり、力はそれに屈する者を「もの」にする。しかし「もの」になるのは敗者だけではない。「力を蒙る魂も力を操る魂もひとしく石化さ

せる」のである。（「ギリシア」42）

戦争は「シーソーゲーム」のように今日の勝者を明日の敗者と化す。敗者となった者たちは「いかなる状況においても、主人の気に入ること以外なにひとつ表明する自由がない」「もの」として自らの魂を隷属させる奴隷の運命を引き受けることになる。そして奴隷となったものの苦悩と不幸が始まる。不幸はつづき、そこからの解放もまた悲劇の様相を帯びる。しかしシモーン・ヴェイユは、人が「自分の運命にただ独りで対峙しようと試みる時、みずからと語り合うことによって自分の魂を見だし」、隣人を愛することができるのだという。不幸な運命と向きあうことで人は思考し、人に愛を向けることができるのだと彼女は考える。だから「人間どうしの愛の純粋なかたちで『イリアス』にかけているものはほとんどない」と彼女はいいきる。（同上 44）それゆえ隷属と悲惨さの感覚は、「正義と愛のための条件のひとつ」なのである。「転変きわまりない運命と必然とがどれほどまでに人間の魂すべてをその従属下に置くものであるかを知らない者は、偶然が自分から深淵を挟んで隔ててしまった人びとを、自分の同胞とみなすことも自分自身と同じように愛することもできない。人間たちのうえに重くのしかかる相反するものからなる多様性は、人間のなかには互いに伝達しあえない異なる種族が存在するのだという幻想を生じさせる。力の支配を知り、しかもこれを尊重しないすべを知らないかぎりには、愛することも義しくあることも不可能である。」（同上 55）自らの屈従の運命を必然として引き受けたからこそ、人は他者を認め愛し、「義しくあること」ができるということは、「イリアス」と同様な戦雲の状況下にあった世界に生きていたシモーン・ヴェイユにはあまりにも明らかなことだったのであろう。

われわれは必然に支配されているという受容的な生の受けとめ方、「必然性を愛さなければならない」という生き方。何か目的があつてわれわれは行動するのではないという受動性、「働きかけない行為」それは「待つ」という行動である。「沈黙し、忍耐をもって待ち望むこと以上に、深く謙虚な態度はない。それは、主人からのどんな命令をも待ちかまえている、いや、命令のないことをも覚悟している奴隷の態度である。」しかし「待つことは、行動する思考の受動のすがたである」と彼女が書くように（「超」56）、それは「強い意志」をもった行為であることを、シモーン・ヴェイユの生き方は証明している。自らの意志ではなく宇宙は動くのに、わたしの意志はその宇宙の必然を愛し、必然を生きたことを意志する。「自分自身の内部で自分自身自身にかかわりなく結ばれた約束に同意する」時（「重力」107）、わたし達の魂は安らかである。

わたし達はその存在の無力を知った時、神はわたし達の存在を許すのだと彼女は信じ、行動したのである。しかし存在の無力を知る、その絶望をシモーンはどのように超えたのであろうか。

8. 「死の瞬間」を生きる

旧約聖書のヨブ、十字架のキリストと同様にシモーン・ヴェイユもまた「あのキリストと完全に同じ状態にされていたい、—その特権をうるためなら、わたしは天国と呼ばれているようなものは全部よろこんで捨ててしまおう」と願う。（「超」141）神はわたしを見捨てた、だから神はいない、無である。その「非在」の神を愛し、神に服従する。これはいったいどういうことか。「存在しないものを愛するとは、—なんという不条理であろうか。それは狂気の沙汰である。」（同上 342）

神は非在であるが、わたしもまた「無い」のではないか。なぜわたしがここに、この身体をもった人としてここに存在するのかわからない。「私があそこでなくてここにいることに恐れと驚きを感じる。なぜなら、あそこでなくてここ、あの時でなくて現在の時に、なぜいなくてはならないのかという理由は全くないからである。」（パスカル 156）しかしわたしはここにいるのだから、誰かがわたしを造りだしたに違いない。わたしは「被造物」である。「わたしたちは、被造物にすぎない。ところで、自分がそれにすぎないと承認することはいわば、無にひとしい者であると承認することである。神が、わたしたちの知らぬうちに与えられたこの存在とは、非存在である。」（「超」191）そして「わたしたちが非存在であることを教えようとして、神ご自身が、非存在になられた」のである。（同上 192）。それゆえ「われわれの生存は、われわれが存在しないことに同意するのを待つ神の意志によつてのみ成り立っている」ということになる。（「重力」89）わたしが生きるということは、被造物として「存在しないことへの同意」をしたわたしが、いまや存在しない神に向かって、この世で生きていかねばならないということである。この不条理、絶対的矛盾を引き受けてわたし生きていかねばならない。

存在しない神に向うとは、すなわち無に向って生きるということである。そして無とは生では無いこと、わたしが生きるとは無に向って在ということ、これもまた絶対的矛盾である。この矛盾をしかしシモーン・ヴェイユは引き受けた。死に向う時間を受け入れるのである。「死を受け容れることが、ただひとつの解放である」と考えていたからである。（「超」68）

しかし彼女にとって死の受容とは、それは「死の瞬間、時間と永遠との交点、十字架の二本の木が交わる点」から目を離さないこと、そこを常に思考することであった。（同上 156）十字架の水平線である「死すべき生」にも、それに交わる垂直の線である「永遠」にも目を向けない。なぜなら水平線は神が「権利放棄」した「わたし」の道を生きることであり、垂直線は、永遠の道、しかし「わたしたちは永遠については何もしらないのだから」この道もいくことはできない。「わたし」を消滅させつつ、しかし永遠への道にも行かない。この「わたし」でもないしかし「神」でもない、その両者のクロスする点から目を離さず生きていく。死の瞬間から目を離さずに生きるというまさに絶対矛盾の道を生きなければならない。

しかし「十字架の交わる点」を生きるということは、時間を超えることでもあろう、時間に縛られたこの「わたし」を消滅することである。過去も未来もわたしの手の届くところには無い。わたしの存在はわたしが決めたことではないのだから、未来はわたしが決めるものではない。今この時、この現在にいつづける決意をしたとき、「それは現在をつらぬいて永遠にまで届くだろう。そこに絶望の使いみちがある。それは人の注意を未来からそれせることである。」（「重」74）過去もまた「われわれの手の届くところにはない。・・・過去から輻射される光が自分たちのもとに届くようにと、その方向に向き直ることしかない。だからこそ、過去は永遠かつ超自然的な実在の最良の表象なのである。思い出がもたらす喜びや美しさはおそらくそのあたりにある」。（「ギリシア」172）

過去も未来も越えてこの「死の瞬間」を生きること、これもまた絶対的矛盾の生である。この矛盾のなかで、キリストと同様、われわれも「わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」と叫びつづけるしかない。その「虚空への叫び、永遠に答えられることのない呼びかけ」をつづけ、シモーヌ・ヴェイユは矛盾を生き、死ぬことを定めたのである。そしてこの「つつましく絶望的な願望の対象、哀願の対象」である「善く生きる」ことを彼女は願った。それは「自分自身ではついに得ることができないもの、しかしまた、ねがい求めるならばかならず得られるもの」である。（「超」119）だからわたしたちは常に思考しなければならないのである。

9. 18年ぶりのシモーヌ・ヴェイユへ

なつかしのシモーヌ、あなたがこの世界にお別れして65年が過ぎてしまいました。あなたが彼岸に逝かれた翌々年、1945年、ナチスドイツは降伏し、あなたの祖国フランスは解放されました。その終戦から60年余り、世界はしかしいまだに様々な場所で戦事下にあり、あなたのいう「正義」の実現は程遠い状況といえるでしょう。

そしてわたくしがあなたと、あなたと同時代に生き、あなたの死後さらに43年も活動が続けたシモーヌ・ド・ボーヴォワールを「二人のシモーヌ」との表題で論じて18年が過ぎました。この18年間、わたくしは、神との絶望的深淵を前に、しかしその運命を独りで担うことを宿命づけられた近代的個人の理念をわたしの「知」の前提としつつ、あなたが問題としなかった（まだ時代がそれを求めなかった）フェミニズムを研究の課題としてきました。さらにここ10年余り「哲学」を学んでいます。その哲学を学べば学ぶほど、「言葉」がいかに大切なものか、われわれは「言葉」をとおして結ばれていることに改めて気づきました。われわれの間に「言葉」があるからこそ、われわれは理解しあうことができるのです。あなたの言う「愛」が生まれるのです。あなたのあの美しい文章が魅了します。

「あわれみと感謝は、神からくだってってくる。そして、あわれみと感謝がふと視線を交わすとき、その視線がであう点に神が臨在したもう。不幸な者も、その相手の者も、神から出発し、神を通してたがいに愛するのであって、神への愛のために愛するのではない。た

がいに相手への愛ゆえに愛するのである。」（「神」田辺訳148）

そしてその「言葉」とはあなたの言う神に垂直にむかうためにあるのではないか。18年ぶりにあなたの著作（以前には読まずに積んでおいた『シモーヌヴェイユ著作集』全5巻も含めて）に改めて向きあいました。18年前にはあなたへの関心は、労働する欲びを奪われた労働者の「不幸」の問題にありました。神の問題は宗教上の問題として捉え、それほどの関心を寄せませんでした。神がこの地上と直接関係している存在だとは考えませんでした。しかし今回あなたを再び読み直したとき、地上の知と神の知は、非同一であるが同一であることにいまさらながら納得したのです。哲学者でもあったあなたが神を取り上げることは矛盾していないことなのだということがはっきりと理解できました。宗教と学問との関係をあなたは次のように書かれています。

「学者は、宇宙のなかに永遠に記されている神秘的な知恵とおのれの精神との一致を目的とすべきである。そうなるとき、科学の精神と宗教の精神とのあいだに、対立や分離などどうして存在しうるであろうか。科学的探究は宗教的瞑想の一形式にほかならない。」（「根」283）

さらに独学で哲学を学んできたわたくしに、「哲学することとはどういうことなのか」を平易な文章で理解させてくれた人が、昨年2月あなたと同様42歳の若さで早逝した池田晶子さんです。彼女もまた「社会の地平」では理解されない「垂直的な精神」を説きます。この垂直性をもった人は、そこに「魂に内在する普遍的な倫理性の核心」を掴んでいると書くのです。また、「人生とは、存在しない死によって存在する生という絶対矛盾的存在」であり、この「存在の謎」を知ると、われわれは「生かされているのではないか」というのです。さらにこの特殊性をもった「この私」とはいったい誰かと問います。私とは誰でもがいう絶対的な主語、それは「すべての主語になるものだから、誰でもないもの」、誰でもないわたしが今ここに何故だか存在する、「何でだか知らないけれども在ってしまった」、この「畏怖の感覚」は宗教につながると書いているのです。自分は「誰でも無い」のだという「零地点の孤独」を知ったときそこに「愛」が生じるのではないかと問うのです。「宗教」に関しても、彼女の考えからすれば、われわれは自分の意志では生きているのではないということになります。自分が生きていることは、何か「超越的な出来事」ではないだろうか、この「意味も根拠もない人生がなぜだかあるのだという」驚くべき謎を受け入れること、それが「本来的な意味での信仰」ではないかといいます。そして「言葉」についても、「言葉では伝えられないということ」を、言葉で伝えて、そしてともに言葉を越えていくのだと書いています。

こうして彼女の哲学もまたあなたの様に、「垂直的な精神」をもつことを目指していますか。「魂に内在する普遍的な倫理性の核心」を、あなたの言う「神」に向きあう真理への道を、だからこそ絶対的矛盾を思考するしかないその覚悟を、わたくしは池田晶子さんから学んだのです。

しかしその池田晶子さんが晩年の講演録で、「人間が崩れてきている」と危惧しているの

です。自分の目の前にある事柄を「自分の力で考える」ことがない人間が増えていること、「人間が痴呆化」する現状を訴えるのです。「目前のことしか見ていない。短絡というのとも違う、たんに目前のことしかない。・・・そういう人たちが加速度的に増えているこの社会のこれからにおいて、たとえば私が『考える』という言葉を使って何事かを言ったとしても、まったく通じなくなる可能性がありますね。・・・人生とは何かというような問いかけすら、あるいは消滅するのではないかという気がします。」(池田 160)

知に携わるものとして、「知的であること」とは何かを考え、それを伝えることを、職業としての「使命」と考えてきたわたくしにとっても、この池田晶子さんの不安は、わたくしのもでもあります。そしてその崩れを立て直すには「言葉」を正しく語るしかないのに、その「言葉」への恐れと、真摯さがわれわれにあるのだろうかと危惧します。「ルカによる福音書」では、十字架につけられたイエス・キリストが、彼を迫害した人々に対して「あの人たちは自分が何をしているのか知らないのです」といわれたことが書かれています。自分のしていることを知らないで生きている人、「自分とは何か」を問わない人、自分はどこから来てどこへ行こうとしているのか、そのことを問わずに目先のことだけに追われている人、今の自分を観照する「自分」をもたない人が増えています。こうした時代に池田さんはどうするか。「私一人でも善く生きよう」、「考えて魂に善いことだけ」をしていくと彼女はいうのです。

先ほどから出てきた「絶対的矛盾」の存在としてのこのわたしの謎、それを神は何も答えない。シモーヌ、あなたは、事物は無限から誕生し無限へと消滅するというアナクシマン・ドロスの言葉を引いて、これこそ真理であり、目で見える力は、「それがけっして越える事のない見えざる限界に服している」と書きましたね。(「根」307) 今われわれはこの真理への畏れを失いつつあるのではないのでしょうか。見えざる限界は、限りがないから無限なのです。垂直に見上げたわれわれは、その先が見えない、わからないからわかれようとするのではないのでしょうか。だからこそわたくしは、多勢に無勢ながら「善く考えて生きる哲学」を続けていくつもりです。

そしてシモーヌ、1934年あなたが工場生活をしていた頃、かつての教え子への手紙で、感覚だけで生きるのではなく、「考えること」を勧めていますね。わたしも全く同じことを学生に言っています。「問いをだし、それを考えて、言葉をもつ」そのためには、本を読んでくださいねと。そうしたらあなたのこの生徒へのお手紙の最後にこのことが書かれているではありませんか。

「楽しい春をすごしてください。空気と太陽の光(もし太陽が出ていたら)を存分に吸いこんでください。よい本をお読みなさい。」(「労働」26)

わたくしは後半年でこの「職場」を離れる決意をしました。しかし若い人たちに向けて今と変わらず「よい本をお読みなさい、そして言葉・ロゴスを持ちなさい」と言いづけていくことでしょう。18年ぶりにあなたに「再会」して、わたしが学生たちに言いづけて

きたことが間違っていなかった、ということが再確認されたのですから。

注

1. 筆者は、『星稜論苑』第10号（1989年）に、シモーヌ・ヴォーボワールとシモーヌ・ヴェイユを「二人のシモーヌ」の表題で論じた。あれから18年、現下の学的状況において、筆者の学問領域がもはや当職場では不要のものとされた今年、筆者は退職を決意し、その最後の論集に「ふたたび、そして最後の二人のシモーヌ」を投稿することにし、二人のシモーヌの著作を読み返した。その結果、近來、ヘーゲル、ニーチェ、プラトンを通して、「右往左往した、せかせかした知ではない知るもの」を探求してきた筆者は、60年前のシモーヌ・ヴェイユが、まさに「知的なこととは何か」を深く思考してきたことを改めて知らされたのである。当職場を去る今、ふたたびシモーヌ・ヴェイユと向きあい、彼女と共に、このイドラー（洞窟）から外に出よう、そう考え書き出したのが本稿である。（なおボーヴォワールは、筆者がこの18年間、その関心から離れていたヴェイユとは異なり、フェミニズムの先駆者として今日なお筆者はその著作を読みつづけているが、今回「知的なること」を接点に二人のシモーヌを論ずることは、筆者には力量不足であったため、シモーヌ・ヴェイユひとりを論ずることにした。）

2. 文中のシモーヌ・ヴェイユの文献引用は、以下の略記にしたがっている。

「重力と恩寵」	「重」
「神を待ちのぞむ」	「神」
「根をもつこと」	「根」
「労働と人生についての考察」	「労働」
「超自然的認識」	「超」
「ロンドン論集とさいごの手紙」	「ロンドン」
「ギリシアの泉」	「ギリシア」

参考文献

シモーヌ・ヴェイユ

『シモーヌ・ヴェーユ著作集 I 戦争と革命への道 ―初期評論集―』、1984、橋本・伊藤・渡辺・根本・松崎・山本・花輪訳、春秋社

『シモーヌ・ヴェーユ著作集 II ある文明の苦悩 ―後期評論集―』1985、橋本・山崎・松崎・山本・花輪・中田訳、春秋社

『シモーヌ・ヴェーユ著作集 III 重力と恩寵、救われたヴェネチア』、1985、渡辺一民・渡辺義愛訳、春秋社

『シモーヌ・ヴェーユ著作集 IV 神を待ち望む他』、1985、渡辺秀・大木健訳、春秋社

『シモーヌ・ヴェーユ著作集 V 根をもつこと』、1985、山崎庸一郎訳、春秋社

『労働と人生についての省察』、1971、黒木義典・田辺保役、草書房

『神を待ちのぞむ』、1981、田辺保・杉山毅訳、草書房

『超自然的認識』、1984、田辺保訳、草書房

『ロンドン論集とさいごの手紙』、1987、田辺保・杉山毅訳、草書房

『ギリシアの泉』、1988、富原真弓訳、みすず書房

大木健、1987、『シモーヌ・ヴェイユの不幸論』、草書房

田辺保、1984、『さいごのシモーヌ・ヴェイユ』、御茶ノ水書房

- 田辺保、1985、『シモーヌ・ヴェイユ その極限の愛の思想』、講談社現代新書
- ジャック・カポー、1978、『シモーヌ・ヴェーユ 最後の日々』、山崎庸一郎訳、みすず書房
- リチャード・リース、1985、『シモーヌ・ヴェーユ ある肖像の素描』、山崎庸一郎訳、筑摩書房
- アレッサンドロ・バリッコ、2006、『イリアス』、草皆伸子訳、白水社
- パスカル、1999、『世界の名著 パスカル』、前田陽一・由木康訳、中央公論新社
- プラトン、1999、『プラトン全集 11 クレイトボン、国家』、藤沢令夫訳、岩波書店
- 池田晶子、2006、『人生のほんとう』、トランスビュー社